

小美玉市の歴史を知ろう 51

佐久嶋民 — 江戸時代の学びと竹原の教育者 —

現代の学校では、どのような教育が行われているでしょうか。小学校を例

に見ると、国語、算数をはじめとする教科や、総合的な学習の時間、近年新たに始まった外国語活動など、教育内容は多岐にわたります。

生徒が一堂に会し勉学に励む、今日の学校風景の源は、江戸時代に遡ります。今回は、江戸時代の学び（学校教育）と、竹原の教育者の一人である佐久嶋民をご紹介します。

江戸時代の学び

江戸時代の学校には、藩士の子弟が通う藩校、郷士などが通う郷校、そして私塾、寺子屋がありました。

庶民教育の主流であった私塾や寺子屋は個人での設立が可能で、自宅やお寺の本堂などが学びの場となりました。市内の主な私塾は、小松塾（上玉里）、女池塾・山口塾・滝平塾（すべて下玉里）などがあります。「東茨城郡誌」上巻には、僧侶や神官、郷士などが指導にあたり、塾の規模は7～8人から、多いところでは50～60人だったと、当時の私塾や寺子屋の様

子が記されています。

庶民教育は、手習い（手本の読み書き）、習字や素読、そろばんなどがありました。教科書は往来物（模範文を教科書用にまとめたもの）が主で、実語教、童子教（訓）、女大学など内容はさまざまです。また、家業に合った教科書を用いるなど、教育内容は比較的自由でした。



当時の教科書の1つ
「女大学」

竹原の教育者 佐久嶋民

「竹原村誌」に、竹原村（当時）の教育の様子や、佐久嶋民について次の記述があります。

「本村（竹原村）には佐久、木村の二人の先生がおり、代々私塾を開いて子どもたちを教育した。教科書は『今川状庭訓往来』・『実語教』、習字は

『名頭』・『商売往来』・『都路往来』などで、学科は習字と読書だけであったが、佐久嶋民・木村後凋の二人の先生になってからは、水戸学や経史を教えたので身を修め家業に励む気風がおこってきた。（後略）」

嶋民が専門的な教育内容を取り入れていたこと、水戸学の教えが広く知られていたことがわかります。

嶋民（本名：敬直）は文化2年（1805年）に生まれた、竹原の教育者です。教えを受けた者は500人以上で、嶋民と生徒の間には君臣のような信頼関係があったそうです。また、講義の声は気力がこもり明るくさわやかで、教え諭す言葉はどの子にも行き届き、深く心に刻み込まれ、感動して涙を流すこともあるほどだったといえます。



嶋民の碑

明治13年（1880年）、嶋民は75歳で亡くなりました。竹原神社近くに嶋民の功績を讃える碑が建っています。碑文の筆をとった佐久敬儀（憲次郎）は嶋民の後裔にあたり、後に竹原村第7代村長になった人です。また、

敬儀の長男である佐久節は、旧制第一高等学校（現 東京大学）の教授を務め、「唐詩選新釈」「漢詩大観」なども著した漢学の権威でした。前述の「東茨城郡誌」には、節が序文を寄せました。

前述の竹原神社は、6月頃から多くの紫陽花が花を咲かせ始めます。地元の方々が手塩に掛けた紫陽花たち。花芽から開花する姿は、種を蒔き、芽を育てる「教育」と重なります。

【語句解説】

実語教…人間としての生き方や教訓が書かれたもの。平安時代末期に成立し、明治初期まで普及した。

童子教（訓）…実語教よりも道德観念を深めた生き方を説いたもの。二宮尊徳も読んでいた書の一つ。

女大学…女子教育の理念や結婚生活の心得を説いたもの。江戸時代中期以降、広く普及した。

今川状庭訓往来…衣食など生活に関することや、身分階層・職業など社会の有様が記載された読本。最も用いられた往来物の一つ。

名頭…源・平・藤・橘・菅など、有名な姓氏の頭字を列記して、読み書きの教材に用いたもの。

経史…経書（儒教の基本である四書・五経書）と史書（歴史書のこと）。